

新たな不登校が生じない取組 「未然防止」の取組

不登校が生じない魅力ある学校・学年・学級づくりの推進

【取組 1】(A 中学校)

体育大会の種目での配慮として、「全員リレー」を、「クラスリレー」に変更した。これは走ることに苦手意識をもつ生徒への配慮として、クラス全員ではなく 20 人程度のリレー形式にし、競技に出場しない生徒は「応援係」として参加することができるようにした取組である。同様にクラス全員で跳んでいた「大縄跳び」も、「跳ぶ係」と「応援係」として全員で参加する形にした。また、「玉入れ」を新しく種目とし、同様の参加形態とした。生徒はこの 3 種目を自身で選択できるようにし、運動に苦手意識をもつ生徒が、体育大会に起因する不安感の軽減に図った。

さらに、教職員と生徒の自由なコミュニケーションの機会を提供した。生徒がどの教員にも相談できるように常に教員同士でも情報共有をし、生徒への声掛けをしている。特に、生徒が管理職にも気軽に相談できる環境の整備をしており、生徒の悩みに管理職を含め全教職員で組織的に対応できるようになっている。

【取組 2】(A 中学校)

生徒会活動の一環として、昼休み等を使い生徒主体のイベントを開催している。具体的には、昼休みに体育館で行った生徒会企画のじゃんけん大会に、学年問わず多くの生徒が参加した。そこでは生徒同士のコミュニケーションが多く見られた。

また、生徒の自由な発表の場を設定し、楽器の演奏や留学体験の発表など、生徒が自身の表現したいことを自由に発表できるようにしている。



【取組 3】(A 中学校)

理科では大学の教員を招いて節足動物の授業を受けてから高尾山でのフィールドワークを行った。英語では近隣の大学の留学生を招き、外国の文化や英語について学ぶ、体験的な学習を行っている。また、家庭科では地域の方に浴衣の着付けを習い、盆踊りを教えてもらって体育館で踊った。このような多様な他者と連携を図りつつ、協働的に授業づくりを行っている。



【取組 4】(B 中学校)

東京都の事業である V L P を周知するために校内研修を行った。より理解しやすく興味をもってもらうために実際に生徒が活動をしている時間帯に実施し、その様子を参加者が直に見ることができた。教員は、実際の画面を見たため、生徒にどのような支援ができるかを理解することができた。

多様な学びの場を確保する取組

（「早期支援」及び「長期化への対応」の取組）の推進

支援会議（B中学校）

不登校支援会議に不登校対応巡回教員が出席し、不登校生徒への支援や関係機関との連携方法について、他校での実践や成果を共有した。他校での好事例を校内に周知することで、不登校生徒への支援方法の充実を図ることができた。

アウトリーチによる支援（C中学校）

各校に配置されているSSWと管理職が常に情報共有して、関係機関との連絡や調整などをSSWが適切にできるようにしている。また、各担任が環境を整備し、SSWと連携して家庭訪問や生徒との連絡を密にするなど、環境づくりも行われている。

校内別室における支援（D中学校）

スクールサポーターが校内別室の環境を整備し、校内別室を利用する生徒の登校状況を把握したり、安心して過ごすことのできる居場所をつくったりしている。例えば、ホワイトボードに生徒の氏名を書いたマグネットを貼り、生徒が登校したら自分で所定の位置に貼り付けるようにして、生徒の登校状況を把握できるようにしている。また、生徒が作った作品を展示し、教員とのコミュニケーションのきっかけにしている。さらに、支援員が校内委員会に参加し、校内別室内での情報を常に共有する体制ができています。校内別室を利用する生徒が、校内別室の利用から徐々に教室に入ることができるようになり、教室復帰ができた生徒もいる。

デジタル機器を活用した支援（D中学校）

授業支援ツールを使用し、時間割や連絡事項を記載して、不登校の生徒への連絡を図っている。結果として教室に入りやすい教科を確認して登校することができた生徒がいる。



関係機関との連携（C中学校）

管理職やSSWを通して子ども家庭センターや児童相談所と情報を共有し、様子が気になる生徒の小さな変化も見逃さないようにしている。また、近隣にある児童養護施設と連携し、不登校の生徒の状況を確認し、必要に応じて面談を行うなど、支援の充実を図っている。

成果

各学校での取組は不登校の未然防止や、教室への復帰に寄与している。管理職と教員が情報共有をこまめに行える環境をつくっているため、関連機関と円滑に連絡調整できる環境が整っている。

課題

生徒の状況に応じた支援の充実を図っていくためには、対応する時間を確保するなどの工夫が必要である。